

『今月の天候と農作業』

通巻第5573号

11月号

平成26年 10月 31日発行

宮 崎 県

宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、高い確率50%です。

3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 11月1日(土)～11月7日(金)

期間の中頃に高気圧に覆われて晴れる日もありますが、気圧の谷や湿った気流の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 11月8日(土)～11月14日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、気圧の谷や南からの湿った気流の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 11月15日(土)～11月28日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 大豆

1 収穫

収穫時に大豆の青立ち株や雑草が混じると茎汁や土で汚損粒の原因になったり、被害粒が多いので予め抜きます。成熟期は完全落葉し莢色が黄色から変色し、莢がカラカラと音がする頃です。コンバイン収穫では、まだ茎水分が高いのでさらに10日程過ぎ、枝がポキポキ折れる時で、茎水分の高い早朝は避けます。逆にバインダーや刈払機では衝撃でのロスを防ぐため早朝か夕方に行います。地際の莢は泥混入に注意します。

2 乾燥

自然乾燥の場合は陰干しし、機械での高温乾燥はしわや皮切れを起こすため温度を30度以下にします。

◆ ソバ

バインダーや手刈りでは、子実の70～80%が黒変した頃の朝夕に行い、10日程島立して子実が粉状になるまで乾燥します。コンバインでは、80～90%黒変時ですが、茎葉に水分が多いと詰まるので注意します。乾燥は静置式乾燥機などで30度以下とし、その後は風選し、粒選別機などで夾雑物を除きます。

◆ 麦類

1 ほ場の準備

排水良好なほ場を選び、碎土は丁寧に行います。麦は酸性土壌に弱いので、石灰質資材で酸度を調整し、堆肥は1ト程施用し元肥は地区基準を参考にします。

2 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行います。播種は早すぎると凍霜害を受けやすく、遅れると穂数不足になります。山間部では11月中旬、沿海部では同下旬から12月始めに行い、周囲や3～5畝間隔に溝を掘り湿害対策を行います。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

気温も下がり、本格的に暖房を開始する時期となります。11月末までは寒暖の差が大きいいため、夕方早い時間から内張ビニルを閉めきって保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の温度管理を心掛けましょう。また、日によって最低気温が高い場合もありますので、特にきゅうり、トマト類の比較的低温で管理する作物については、一定の時刻で内張の開閉を行うのではなく、夜温がそれほど下がらない場合は内張ビニルを閉める時間を遅くする（場合によっては閉めない）など、状況に応じた管理を行います。

◆ きゅうり

ハウス抑制栽培は子づる及び孫づるの収穫期となりますが、成り疲れにより草勢が低下しやすい時期です。適期収穫を行うとともに不良果は早めに摘果するようにします。かん水は10畝当たり1.5～2t/日を目安に行い、追肥は草勢や着果状況に応じて、10畝当たり窒素成分で5～6kg/月を目安に灌水時に液肥として施用します。ハウス内の温度管理は、午前中26～28度、午後23～25度、夜間12～14度とします。

促成きゅうりは摘心栽培、つる下ろし栽培ともに、植付けの早いものは主枝収穫期から側枝収穫期となります。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢をコンパクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが大切です。10度を目安にできる限り低温での夜温管理を行います。夜温が高い場合、果実肥大を優先せず、内張ビニルを解放しハウス内の湿度を下げるなどの対策を行います。追肥は主枝収穫開始と同時に開始し、10畝当たり窒素成分で0.2kg/日を目安に行います。かん水は果実肥大にあわせておこないますが、10畝当たり0.8～1.0t/日を目安に少量多回数での灌水管理をおこないます。日中の温度管理は、ハウス抑制きゅうりに準じておこないます。

◆ ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量も多くなり、最初の収穫最盛を迎えます。樹への着果負担も大きく、収穫遅れになると、さらに草勢低下を招き、うどんこ病等の発生を助長しますので、適期収穫を心掛けましょ

う。草勢維持のため、果実の着果状況に応じてかん水、施肥管理を行います。目安として、かん水は10畝あたり1.2～1.5t/日、追肥は10畝あたり窒素成分で0.2kg/日とします。下旬より収穫の終了した第3分枝のフトコロ枝を順次除去し、通風、採光の改善を図りましょう。

◆ トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトともに収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水と追肥をおこないますが、追肥は草勢を見て、大玉トマトで第3果房、ミニトマトで第5果房開花時より開始し、10畝あたり窒素成分で1kg/1週間（ミニトマトの場合は2割程度増やす）を目安に施用します。ハウス内の温度は、午前中25～28度、午後22～25度、夜間8～10度とします。ミニトマトの夜温は大玉トマトより1～2度高めに管理します。

◆ いちご

今年は育苗後期の日照不足や曇雨天、台風の影響で、定植も地域により異なっているようです。このため、夜温管理として、開花肥大期は10～12度、着色期8～10度、収穫期7～8度を目安に、ほ場の生育状況に合わせた温度管理を行います。中旬より電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2.5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで5分間/時間、暗期中断は深夜1時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行います。

(黒木正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ レタス

外葉が10枚前後になると結球を始めます。生育適温は15度から20度で、10度以下では生育が遅れます。温度が高すぎると筍球（縦長の形状）等になりやすく、低すぎると生育遅延や硬く締まった小玉になります。結球後は5度以下になると低温障害が発生しやすく、品質が低下しやすくなります。気象変動の大きい月なので下旬にはトンネル資材を設置し急な寒波にも対応できるように準備します。

◆ ブロッコリー

7～8月播きの収穫期となります。収穫の目安は頂花蕾の出蕾後10～15日となります。収穫遅れにならないように注意しましょう。

◆ たまねぎ

普通栽培（4月以降に収穫）の定植時期となります。植付けの深さは3～4センチで、深植えすると収穫時に縦長球（レモン球）の発生が多くなりますので注意が必要です。植付け後3～5日間は株元を中心にかん水を行い活着を促します。

◆ らっきょう

分球を始める時期です。分球及び生育促進のため、10㎡当たり窒素成分で5㎏程度を施用し、土寄せをおこなってください。

◆ 食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期ですが、腐敗防止のため罹病いもや傷いも等を選別して貯蔵します。いもは9度以下で腐敗し、18度以上で萌芽します。貯蔵の適温は13度、適湿度は90%ですので貯蔵庫の温湿度管理に留意します。収穫直後のいもは呼吸作用が大きいので一度に大量に入庫すると庫内のCO₂濃度が上昇したり、湿度が高くなり結露する場合があります。入庫時から空調を積極的に利用して結露を防止しますが、空調が無い場合は貯蔵適温の時間帯に換気して庫内を除湿し新鮮な空気と入れ替えましょう。

◆ さといも

中生種の出荷期です。自家採種をする場合は優良なものを選抜し、子いもが離れないように株毎保存します。ほ場で保存する場合は低温障害をうけないよう、厚めに培土するなどの対策が必要です。

（河野 健次郎）

果樹

1 常緑果樹

◆ 中晩生かんきつ全般

肥料が吸収されるには、12度以上の地温が必要とされ、今月がその時期に当たります。年明けに収穫される日向夏や不知火などのかんきつ類ではこの時期の施肥が、翌年の花芽の充実の有効とされています。11月中旬までに施肥を行いましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は結果時期が遅かったため、平年よりも果実肥大が遅れています。十分に肥大が確保されるまでは、秋季加温を行いましょう。昼温28度程度を確保し、夜温は18～20度を確保し、ある程度肥大が確保されたら、徐々に温度を落としていきましょう。

ビニールを被覆したハウスでは、ハダニが発生しやすくなります。また、収穫直前の防除は、果皮の裂皮を引き起こします。ハダニの発生に注意し、早めの防除を心がけましょう。

◆ マンゴー

花芽分化に向けた管理としては、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度で抑え、夜間の最低気温8度程度を維持しましょう。十分に低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。五割程度の花芽発生を確認したら、ハウスの夜温を15度に向けて徐々に上げていきます。急速に花芽を伸長させると、花粉の形成不良や子房の生育不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を引き起こすことがあります。開花が始まるまでできるだけ昼間の高温を避け、じっくりと花芽を生育させましょう。

2 果樹園共通

防風林や防風ネットの整備は、冬の仕事です。防風林は、あまり密閉状態にせず、適度に風が通るように整理します。防風林が高すぎたり、密閉度が高いと、発芽が遅れたり、アザミウマ類などの害虫被害が多くなるので、注意が必要です。防風ネットは、傷んでいる部分をしっかりと補修しましょう。

(山口和典)

花き

◆ 電照ギク

11月になると気温が低下し、結露しやすい状況が続きます。曇雨天で夜温が高いと加温機が作動せず、白さび病が発生しやすくなります。親株床から予防を徹底し、本ぼへの持ち込みを防ぐとともに、ハウス内では送風等で結露を防ぐなど、各対策を組み合わせることで予防を行いましょ。う。

年末出荷作型は摘蕾期になります。花首の徒長防止や花のボリュームを出すために摘蕾作業は適期に実施してください。

◆ スイートピー

採花が開始されます。天候の変化に十分注意し、曇雨天が予想される場合は液肥・かん水を控えるなど草勢に応じた肥培管理を行ってください。11月上～中旬には施設のサイドを閉める気温になります。

◆ デルフィニウム

中山間地域の1番花の収穫が終了した場合は、ロゼットを打破させるためにハウスを開放し、低温に遭遇させてください。沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を活用し、茎の硬化を図り、収穫後は適切な前処理を行いましょ。う。

また、2番花のロゼットを回避するため、花穂伸長の終了時から電照を開始しましょ。う。

◆ トルコギキョウ

生育後半の過剰施肥と曇雨天によりブラスチングが多発しますので、追肥は発蕾前には終えましょ。う。10月に定植したものはチップバーン等が発生しやすい時期に入りますので、一時かん水を控え、根域を広げるとともにカルシウム剤の葉面散布や硝酸カルシウム水溶液のかん注処理を行いましょ。う。

◆ ラナンキュラス

過かん水は葉や球根の腐敗の原因になります。徐々にかん水間隔を広げて

根の伸長を図ってください。最低気温が5度を切るようになると保温・加温が必要になりますが、昼間は15度ぐらいを目安にできるだけ換気を行い、品質の向上に努めましょう。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

今月は朝晩の冷え込みが厳しくなる時期に入りますので、朝夕の畜舎カーテンの開け閉めを行い、畜舎内の温湿度環境の改善を図りましょう。また、本格的な冬を迎える前に、幼畜用の保温機材の点検と、子牛の風よけ等の寒冷対策の準備を行いましょう。さらに、和牛や乳牛の母牛は、気候が安定し、生産性が安定する時期ではありますが、飼料作物の収穫時期でもあり、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されることから、交配期にある牛については、朝夕の観察の徹底を図りましょう。

豚では、生産性が安定する時期ではありますが、特にPEDの発生が懸念される時期となりますので、妊娠豚へのPEDワクチンの全頭接種を行いましょう。また、鶏については鳥インフルエンザの発生リスクが高まる時期に入りますので、防鳥ネットの点検補修など、侵入リスクの低減を図りましょう。

◆ 飼料作物

牛の粗飼料では、飼料稲やソルゴーなどの収穫時期と、イタリアン・エン麦などの、秋冬作物の作付け時期が重なる時期です。飼料作物の栽培においては、飼養管理に影響が出ないように計画的な作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。

◆ 家畜防疫対策

鳥インフルエンザ等のウイルス疾病の発生のリスクが高まる時期に入ります。畜舎消毒や野生動物対策などの侵入防止対策の再点検を行いましょう。

(三角 久志)

特用作物

◆ 茶

1 寒害・凍害防止対策

冬期の寒害・凍害の防止対策として防風垣や防風ネットを設置します。また、幼木園では、敷き草の全面施用は幹割れが発生しやすくなりますので、敷き草はできるだけうね間中央に寄せるようにします。もし幹割れが発生した場合には、被害直後に株元に土寄せを行いましょう。

2 病害虫の防除

近年、一番茶前に増加傾向にあるカンザワハダニに対しては、越冬前の防除が重要です。飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への散布状況を確認しながら、専用ノズルの使用と適正な散布に心掛けてください。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の葉の裏に寄生して越冬しますので、茶の葉の裏を確認し、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

(佐藤邦彦)

◆ しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施し、11月下旬頃までには行いましょう。また、伐採後は、葉枯らし乾燥を1～2カ月程度実施しましょう。

2 発生操作

品種の特性にあった最低気温になってから、ほだ起こしや散水等の発生操作を行いましょう。なお、低温性の品種など、発生操作前にほだ木に雨がからないようにした方が、安定した発生を期待できる場合がありますので、品種の特性について、種菌メーカーに事前に問い合わせると良いでしょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 葉たばこの大きな減収要因である土壤病害（立枯病、疫病等）の菌密度の低下と、土壤消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を月に3回行いましょう。

2 耕作予定ほ地の土づくりに努めましょう。土壤改良が必要な場合は、石灰、ようりん等の散布を行いましょう。石灰散布の注意点として、土壤消毒との間隔が1ヶ月以上必要となります。

3 土壤消毒は、農薬使用基準に則って土壤水分の適正な時期に実施しましょう。実施する際には、農害、公害のないよう十分注意してください。

また、土壤消毒剤の空缶は地域で決められた方法で適切に処理しましょう。

4 良質堆肥を10㎡当たり1,200㎏施用に向けて、材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるために水分状態に注意しながら月に1回程度切り返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

（井上 馨）

内容の詳細について

1 1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	並	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入の防止に努めます。一部の地域で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
	ハスモンヨトウ	やや多	10月以降平年よりやや多い状況で推移しています。中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って野外からの侵入を防止します。
	タバココナジラミ類(ハイトイタイプ B (シルバリーフコナジラミ)、ハイトイタイプ Q)	並	タバココナジラミ類には薬剤の効きにくいタイプの発生が確認されていますので、薬剤散布後は防除効果を確認し、不十分な場合は追加の防除を行います。
冬春きゅうり	べと病	並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。 さらに、窒素切れによる草勢の低下や逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。
	うどんこ病	やや多	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病(MYSV) ミナミキイロアザミウマ	— 並	ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)が、一部施設栽培等で確認されているため注意が必要です。感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し埋却処分するか、完全に枯れるまで密封処理します。
冬春ピーマン	斑点病	やや多	両病害とも多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。
	うどんこ病	並	
	ミナミキイロアザミウマ	並	10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。また、多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病	並	多湿条件下や肥料切れで発生しやすいので、ハウスの換気を良好にするとともに草勢維持に努めます。
	トマト黄化葉巻病(TYLCV)	並	トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミ類によって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り適切に処理します。
	タバココナジラミ類	並	
冬春いちご	うどんこ病	並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。 炭疽病は、多湿にならないようにほ場の排水対策を十分行うとともに、発病株は周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。
	炭疽病	並	
	ハダニ類 アブラムシ類	並 並	収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
かんきつ類	ミカンハダニ	並	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は、収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	並	本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でないと翌年の一番茶への影響が大きくなります。

1) ※は防除情報を発表しています。

2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。